



秋田県男鹿方言の第 1 音節母音の「長さ」について

著者	近藤 清兄
雑誌名	東北大学言語学論集
号	8
ページ	29-34
発行年	1999-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00129632

秋田県男鹿方言の第1音節母音の「長さ」について

近藤清兄

はじめに

筆者はこれまでの一連の秋田県男鹿方言の記述（近藤1995a, b, 1996a, b, 1997a, b, 1998a, b）において、同方言では母音の長さは弁別的でないという考えをとってきた。

しかし、以下に述べるような現象が存在することが次第にはっきりしてきたので、母音の「長さ」とアクセントとの関係を中心に記述してみる。

以下では例によって筆者によるローマ字表記方式を用いて記述する。

例は主に筆者及び筆者の父近藤貢太郎（昭和7年男鹿市船川港金川生）の発話によるが、両者のアクセントに今回問題となるような大きな相違点はないので、特に断らない限り筆者の内省によるものと見なされたい。

凡例 ○／●モーラ（黒は高いところ）

□／■2モーラ音節

本稿は1998年11月1日、日本言語学会第117回大会（於・山口大学）で行った口頭発表原稿をもとに加筆と訂正を行いまとめたものである。会場でコメントを下された原口庄輔教授ほか諸先生方に感謝する。

1. 第1モーラと第2モーラは高さが違っていなければならない

秋田県男鹿方言（以下「男鹿方言」）では、第1モーラと第2モーラはその高さを違えねばならない（近藤1995:94-96）。これは東京アクセントについてもよく知られた現象である。

●○	berò	涎	kimi	トウモロコシ
○●▽	hagá	墓	tagó	蛸
○●▼	bego	牛		
○●○	terēbi	テレビ	pianò	ピアノ
○●●▽	dohurá	カボチャ	Akitá	秋田
○●●▼	ozige	みそ汁		

etc.

即ち、第1モーラが高ければ、第2モーラ以降は低くなる。第2モーラが高いのなら、第1モーラは低くなければならない。

2. その例外と条件

ところが、以下のような場合に例外となる。

イ) CVn-

- 1) zyèn●○～■▽銭 (第2音節以下でも起こる。kabân○●○～○■▽鞆)
- 2) nantò■○なんと
- 3) tanmà■○「タンマ」
- 4) kendò■○ 剣道
- 5) zinzyà■○ 神社
- 6) nanbó□●▽<＊○●●▽いくら
- 7) dankó□●▽尻 (肛門)
- 8) tanpé□●▽唾 (吐いたもの)
- 9) henhé■●▽～□●▽ 先生
- 10) zyenkó■●▽～□●▽ 金銭
- 11) ban⁻ge■●～□● 夜
- 12) sanma■●▽さんま
- 13) danbùri■○○ とんぼ
- 14) anpurá■●●▽～□●●▽ ジャガイモ
- 15) monsazi■●●▽ 「門札」(表札)
- 16) monda'e■●●▽ 問題

ロ) 長母音を含むCVVに由来するもの

- 17) a. ○●■ hosityokin 補償金
b. ●●■ hosityokin 報奨金 (第1音節母音は長なくてよい)
bを仮にowと書くことにする。即ち、howsyokin。
- 18) ciyó○●▽ つゆ、汁 : ciyo●●▽ 通用→cuwo
- 19) gyoka'e○●●▽ 魚介 : gyoka'e●●●▽ 業界→gyowka'e
- 20) goma○●▽ 胡麻 : Goma●●▽ 郷間 (姓) →Gowma
- 21) gyoen○●●▽ 御苑 : byoen●●●▽ 病院→byow'en
- 22) yasen○●●▽ 野戦 : yasan●●●▽ 「ヤーサン」→yahsan
- 23) kosan○●●▽ 古参 : kosan●●●▽ 降参→kowsan
- 24) gohan○●●▽ 誤判 : gohan●●●▽ 合板→gowhan
- 25) tesen○●●▽ 手銭 : tesen●●●▽ 停戦→teysen
- 26) dogyó○●▽ 度胸 : Tokyo●●▽ 東京 →Towkyo
- 27) dedā⁻garí○●●●▽ 出たがり : detatorí●●●●▽ データ取り→deytatorí
- 28) sema'e●●●▽ 精米→seyma'e
- 29) kesazi●●●▽ 警察→keysazi
- 30) kesan●●●▽ 計算→keysan
- 31) Supamàn●●○○ スーパーマン →Suwpmàn
- 32) nyūba'e●●●▽ 「入梅」(梅雨) →nyūwba'e

ハ) 複母音Ca'e

- 33) a. ○●○ ha'edà 生えた (これを●●○とする人もあるかもしれない)
b. ●●○ ha'edà 掃いた (これを○●○とするのは不可)

bをayと書くことにする。即ち、haydà。aは仮にhayedàとしておく。

- 34) ka'e○●買え (■は不可) →kaye : ka'esya■●▼会社→kaysya

- 35) ra'ebàru●●○○ライバル→rāybàru

ニ) 無核の1モーラ語

- a. ●▽ hi(sa) 火 (に)

- b. ●▼～○▼ hi(sa) 日 (に)

- 36) eanba'e●●●●●▼胃の具合→e anba'eと分ける cf. ean○●●▼慰安

●●● (○●●は不可) kimugi お天気屋[五城目町の例]

kiymugiと書いておくことにする。

この例は、ニ) に由来するものだが、

「長さ」が化石化したもので、ロ) の部類とみてよいであろう。

3. 以上のように、

第1音節が何らかの形で「長い」ことが、アクセントのありように影響していると考えられる。ただし、ロ) では実際には母音は「長く」はない。

4. 母音の「長短」の別はないとしてきたことについて

これまで筆者は、男鹿方言では母音の長短は弁別的でないと考えてきた。

実際、「長く」発音されないのが普通であるからであったが、上で見たような条件の下では、「長さ」に関連した現象が起きる。

また、2. ロ) のケース (長母音由来) では、実際に「長く」発音してもよい。その場合、例えば■●●は○●●と互いに自由変異をなす。

- 37) kazyô○●▼課長 : kacyôð○●○ (同)

後者は「標準語化した」形、もしくは秋田における「標準語」形といえよう。

5. 「昇り (上げ) 核」の可能性の検討

2. ロ) のケースで、昇り (上げ) アクセント核を想定することはできないだろうか。

上げ核の存在を仮定すると、その分布は著しく限られたものとなり、不自然のように思われる。

下げ核は「第1モーラの前」以外ならどこでも自由に現れうるが、もし「上げ核」があるとする、それは前から2モーラより奥へは行けないことになる。しかも、「長さ」と

関係のある第1音節の場合以外には現れない。下げ核は第1音節の性質にはほとんど影響されない。

○○○●○といったパターンは許されないわけである。大阪方言ではかなり自由に現れようだ。。

タケノカワ○○○●○ (竹の皮)

ハダデスワ○○○○●○ (破談ですわ)

(笑福亭仁鶴「無いもん買い」1975.7.28収録、ビクターVICG-15094)

6. 通時的プロセスの推測

このような現象を生じるに至った過程を推測してみよう。

a * [●○]○ > ■○

b * [○●]○ > ■○

c * [○●]●▽ > □●▽ (～■●▽)

d * [○●]●▼ > ■●▼

■○の形がabいずれにさかのぼるかは、内的には決定できないことになる。つまり、合流してしまっている。

これらの変化は、「第1モーラと第2モーラはその高さを違える」という法則の確立よりも後に起こったものと考えられる。なぜなら、もしそれより前だとすると、長母音の短母音化によって、cは●●▽、dは●●▼となるが、これらはそれぞれ○●▽、○●▼に再整理されていたはずで、つまりは生じていないはずの形である。

まとめ

結局、男鹿方言には母音の長短の別は(表層には)「ない」としてきたが、第1音節(の基底)には以上述べたような形で「長さ」があることがわかった。

- ・第1音節が2モーラ音節であったり(イとハ)、
- ・長母音にさかのぼるものであったり(ロ)する場合、
- ・また本来1音節語であるもの(二)は、第1モーラと第2モーラの高さが同じであってもよくなり、その際:

○○/□ (第1、第2モーラともに低い) ～ ●●/■ (ともに高い)
という自由変異を生ずる。

付記 ローマ字表記の改良とその目的

本稿では母音の「長さ」についてのみ次のように改変してみた。

A. 本稿で仮に用いた方法

a+h e+y i+y o+w u+w æ+y(aey)

長所：できるだけその母音と縁のある半母音字を用い、直観的に解りやすいものになるようにしている。

短所：単なる記号上の約束であるのに、重母音と間違われやすい。

次に母音字が来たときの処理に工夫が必要。

21)byow'en この例ではアポストロフィを分離記号に用いている (a'eの類推から)

別の方法もありうる。例えば：

B.「空き」になっているx,qなどを用いる

長所：他の場所に使用されていないので読みは一意になる。

短所：直観とかけ離れた表記になる。

ところで、筆者はこの間電子メール等による方言資料の伝達と共有を考え、無補助記号表記法の考案を真剣に検討した。

その一方、文書整形システムLaTeXの存在を知り、このシステムによればテキストファイル文書であるにもかかわらず各種補助記号が使えることを知った。今後は従来の表記法を同システム上で実現していきたいと考えているが、上に述べたごとく電子メールによってプレーンテキスト形式での方言資料の処理をも並行して行いたい。今回の表記法の改良はその方向を視野に入れたものである。

無補助記号表記法 (案)

アクセント方式を採用。

ɑ→'a

æ→ae

a'e→ayとayeに分かれる。33)、34)参照。

tadɑ→ta'd'a (無料)

hēbi→h'e'bi (蛇)

byow'en→byow-en (アポストロフィはアクセント表記に用いたので、分離記号はハイフンとする)

電子化した場合の文字化けを防ぐため、補助記号のスーパーインポーズは減らしていきたい。上の方式ではスーパーインポーズはなく、全て線状に並ぶ。

+や¥等の記号をアクセント表記に使用することも考えられる。¥は英語キーボードでのバックスラッシュに相当するが、これはLaTeXでコマンドに用いられているため、互換性や移植の便宜を考えるとあまり使いたくない。

参考文献

- 近藤清兄 1995a 秋田県男鹿方言のローマ字表記について
「聖霊女子短期大学紀要」23, 秋田市.
- 1995b ローマ字版・男鹿の民話
「高清水の岡」1, 聖霊女子短期大学英語科, 秋田市.
- 1996a 秋田県男鹿方言の動詞形態論
「聖霊女子短期大学紀要」24, 秋田市.
- 1996b 秋田県男鹿方言の形容詞形態論
「東北大学言語学論集」5, 仙台市.
- 1997a 秋田県男鹿方言の名詞形態統語論
「聖霊女子短期大学紀要」25, 秋田市.
- 1997b 秋田県男鹿方言の時間表現
「東北大学言語学論集」6, 仙台市.
- 1998a 秋田県男鹿方言の不変化詞
「聖霊女子短期大学紀要」26, 秋田市.
- 1998b 秋田県男鹿方言の合成名詞と接辞
「東北大学言語学論集」7, 仙台市.

(こんどう・すがえ/ 聖霊女子短期大学英語科講師)

Email: sugayek@seirei-wjc.ac.jp

sugayek@ma2.justnet.ne.jp